

# 天智天皇(中大兄皇子)

## 【人物概要】

舒明天皇の第二皇子。本名は葛城皇子という。大兄の号をあたえられて中大兄皇子とも称した。しかし、そのために古人大兄皇子をおす蘇我入鹿と対立していた。

中臣鎌足らと謀りクーデターを起こして蘇我入鹿を殺害し(乙巳の変)、叔父・孝徳天皇を即位させ、自身は皇太子となった。そして大化という元号を制定し、様々な改革を行なった(大化の改新の中心人物)。また、有間皇子などのちのちクーデターを起こしそうな勢力を罫に嵌めて死刑とした。

孝徳、斉明(皇極重祚)の皇太子として天皇制確立を目標とする政治改革を断行し、公地公民制度の実現をめざした。白村江(はくすきのえ)での唐・新羅連合軍に大敗した後、都を飛鳥から近江大津宮に移して即位。後世の戸籍の原形でもある「庚午年籍」(こうごねんじやく)を作り、近江令を制定し内政を整えた人物でもある。

写真又はカット割り

写真又はカット割り

## テーマ及びその関連性

### 【テーマ】 国家の源流

### 【テーマとの関連性】

大化の改新(乙巳の変)で蘇我氏を打倒し、天皇を中心とする国家体制の樹立をめざす。中国帰りの留学生を政治・外交顧問として、唐の律令制にならった政治改革、経済制度改革、進んだ大陸文化・技術の導入を積極的に行い、律令国家への道を歩み始める。

# 天智天皇(中大兄皇子)ストーリー(案)

## サブキャスト

### 中臣鎌足

#### 【役どころ】

蘇我氏体制打倒の意志を固め、中大兄皇子に接近。645年、蘇我蝦夷・入鹿を打倒。この功績から、内臣(うちつおみ)に任じられ、軍事指揮権を握る。669年、死の直前に天智天皇から大織冠を授けられ、「藤原」の姓を賜った。

### 蘇我入鹿

#### 【役どころ】

蘇我馬子の孫。皇極天皇の即位に伴い、父・蝦夷に代わって政治の実権を握る。聖徳太子の子の山背大兄王を自殺に追い込み、蘇我派の古人大兄皇子の天皇擁立を図る。中大兄皇子らにより、飛鳥板蓋宮の大極殿で暗殺された。

### 有間皇子

#### 【役どころ】

孝徳天皇の皇子。父・孝徳の死後、蘇我赤兄の誘いをうけ、斉明天皇、中大兄皇子らの打倒を画策するが、赤兄に裏切られて計画が露見。謀反の疑いで捕らえられ、絞首刑となった。

## シーン1 大化の改新

蘇我氏は稲目、馬子、蝦夷、入鹿の四代にわたり政権を掌握していた。中臣鎌足は、蘇我氏による専横に憤り、大王家(天皇家)へ権力を取り戻すため、まず軽皇子と接触するも、その器ではないとあきらめる。そこで鎌足は、中大兄皇子に近づく。蹴鞠の会で出会う話は有名。共に南淵請安(みなぶちのしょうあん)に学び、蘇我氏打倒の計画を練ることになった。中大兄皇子は、蝦夷・入鹿に批判的な蘇我倉山田石川麻呂の娘と結婚。石川麻呂を味方にし、佐伯子麻呂、葛城稚犬養網田(かつらぎのわかいぬかひのみた)らも引き入れる。

645年6月12日、飛鳥板蓋宮にて中大兄皇子や中臣鎌足らが実行犯となり蘇我入鹿を暗殺。翌日には蘇我蝦夷が自らの邸宅に火を放ち自殺。蘇我体制に終止符を打った(乙巳の変)。乙巳の変の直後、皇極天皇は退位し、中大兄皇子に皇位を譲ろうとしたが、中大兄と鎌足との相談の結果、皇弟・軽皇子が即位し、孝徳天皇となり、中大兄皇子が皇太子になった。これは、推古天皇の時、聖徳太子が皇太子で政治の実権を握っていたことを模したものであると推定されている。新たに左右の大臣2人と内臣(うちのおみ)を置いた。さらに唐の律令制度を実際に運営する知識として国博士を置いた。この政権交替は、蘇我氏に変わって権力を握ることではなく、東アジア情勢の流れに即応できる権力の集中と国政の改革であったと考えられている。

写真又はカット割り

## シーン2 齊明重祚と有間皇子の変

孝徳は645年12月に都を難波宮に移す。しかし、653年に中大兄皇子が、都を倭京に戻す事を求めた。しかし、孝徳天皇はこれを聞き入れなかったため、中大兄を初めとする皇族達やほとんどの臣下達が倭京に戻ってしまった。皇后の間人皇女でさえ兄に従い、戻ってしまった。失意の中、孝徳天皇は翌年10月に崩御。このため、宝皇女が再び飛鳥板蓋宮で齊明天皇として即位した。

有間皇子は、心の病を装って牟婁の湯に療養に行き、飛鳥に帰った後に自分の病気が完治した事を齊明天皇に伝え、その土地のすばらしさを話して聞かせたため、齊明天皇は紀の湯に行幸した。飛鳥に残っていた有間皇子に、中大兄皇子の意を受けたと思われる蘇我赤兄が近づき、齊明天皇や中大兄皇子の失政を指摘し、自分は皇子の味方である事を伝え、齊明天皇と中大兄皇子打倒の計画を練った。

しかし、赤兄の密告によりこの謀反計画は露見し、彼は守君大石(もりのきみおおいわ)・板合部連楽達と捕らえられ、658年11月9日に中大兄皇子に尋問された。その時、有間皇子は「全ては天と赤兄だけが知っている。私は何も知らぬ」と答えた。有間皇子は、11月11日に藤白坂で絞首刑に処せられた。

写真又はカット割り

## シーン3 白村江での敗戦と内政改革

百済が660年に唐・新羅に滅ぼされたため、当時日本に滞在していた百済王子・扶余豊璋(ふよほうしょう)を送り返し、百済復興を図った。百済救援を指揮するために筑紫に滞在したが、661年、齊明天皇が崩御した。中大兄皇子はその後、長い間皇位に即かず称制したが、663年、白村江の戦いで大敗し、百済再興は果たせなかった。

白村江の戦い以後は、唐軍の報復的な来襲にそなえ、北九州に防人をおき、太宰府に水城、また西日本に烽火をおいて臨戦態勢にはいった。しかし豪族たちが新政策をうけいれてきたのは、朝鮮半島での勝利が前提だった。それが失敗したことで豪族の不満が強まり、中大兄は翌年664年民部・家部など私有民の一部の復活をみとめて懐柔にあたるいっぽう、667年に近江大津宮に遷都し、翌年即位(天智天皇)してその圧力をしのいだ。

また、冠位もそれまでの十九階から二十六階へ拡大するなど、行政機構の整備も行っている。即位後の670年には、我が国最古の全国的な戸籍「庚午年籍」を作成し、公地公民制が導入されるための土台を築いていった。

写真又はカット割り

## 関連する寺院・史跡等と展示例

### 飛鳥寺(法興寺)



#### 【具体的展示】

##### ■人物紹介(例):

皇極天皇、中大兄皇子、中臣鎌足、蘇我蝦夷・入鹿父子らの人間関係を紹介。

##### ■歴史展示(例):

中臣鎌足と中大兄皇子の出会いの場であることを「蹴鞠」の紹介とともに具体的に解説する。また「入鹿の首塚」伝説についても紹介する。

### 水落遺跡



#### 【具体的展示】

##### ■人物紹介(例):

斉明朝の皇太子・中大兄皇子の功績を「漏刻」との関わりで紹介。

##### ■歴史展示(例):

斉明期の内政・外交政策の目的を当時の東アジア情勢とともに解説する。

### 飛鳥稻淵宮殿跡



#### 【具体的展示】

##### ■人物紹介(例):

大化の改新後、中大兄皇子をとりまく人間関係を紹介する。

##### ■歴史展示(例):

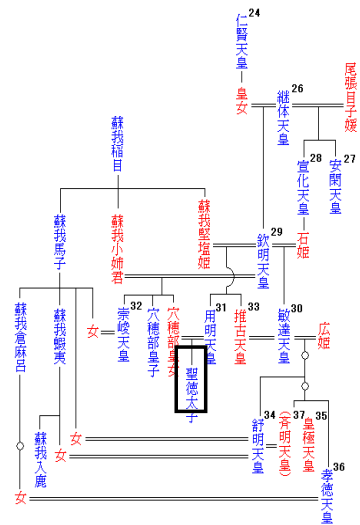
稲淵宮殿跡の歴史的意義をイラストによる宮殿の復原とともに解説する。

# 聖徳太子(厩戸皇子)

写真又はカット割り

## 【人物概要】

敏達天皇3年(574)1月1日、用明天皇の第二皇子として誕生。  
厩戸の前で出生したことよるとの伝説や叔父・蘇我馬子の家で生まれたことから馬子屋敷が転じて厩戸(うまやど)と付けられたという説もあるが、現在のところ生誕地の近辺に厩戸(うまやど)という地名があり、そこから名付けられたという説が有力である。別名・豊聡耳(とよとみみ、とよさとみみ)、上宮王(かみつみやおう)とも呼ばれた。  
父方の祖母は蘇我稲目の娘堅塩媛(きたしひめ)、母方の祖母も同じく稲目の娘小姉君(おあねのきみ)であり、**厩戸皇子は蘇我氏と強い血縁関係にあった。幼少時から聡明で仏法を尊んだ**と言われ、様々な逸話、伝説が残されている。  
聖徳太子は当時最大の豪族である蘇我馬子と協調して政治を行ない、隋の進んだ文化をとりいれて**天皇の中央集権を強化し、新羅遠征計画を通じて天皇の軍事力を強化し、遣隋使を派遣して外交を推し進めて**隋の進んだ文化、制度を輸入した。**仏教の興隆**につとめ、『国記』、『天皇記』の編纂を通して天皇の地位を高めるなど大きな功績をあげた。



## テーマ及びその関連性

【テーマ】  
仏教伝来と興隆

【テーマとの関連性】  
飛鳥寺や法隆寺など各地に寺院を建立したり、朝鮮半島から僧を招いたり、役人に仏教信仰を奨励したり、と仏教興隆を国策として推進していった。

【テーマ】  
国家の源流

【テーマとの関連性】  
太子と馬子の連立政権の状況の中で、遣隋使を派遣して積極的に大陸の文化や政治制度の導入をはかり、官僚制度の確立や歴史書の編纂などを行って、中央集権国家としての体裁を整えていった。

# 聖徳太子(厩戸皇子)ストーリー(案)

## サブキャスト

**推古天皇**  
【役どころ】  
第33代天皇。欽明天皇の娘で、母は蘇我稲目の娘・堅塩媛(きたしひめ)。敏達天皇の皇后となり、崇峻天皇暗殺事件後、39歳で即位、**日本最初の女帝となった。叔父の蘇我馬子、甥の厩戸皇子とともに中央集権国家樹立を目指した。**

**蘇我馬子**  
【役どころ】  
敏達・用明・崇峻・推古四代の**天皇にわたって朝廷の実権を握った**。馬子に反発した崇峻天皇を東漢直駒(やまとのあやのあたこま)に命じて天皇を暗殺させ、推古天皇を擁立した。

**小野妹子**  
【役どころ】  
607年、推古天皇、**聖徳太子の意を受け、遣隋使として中国に渡航**。「日出処天子」の文言で知られる国書を携え、煬帝(ようたい)の不興を買うが、翌年、裴世清(はいせいせい)らを伴い帰国。煬帝からの返書を百済で紛失し、一時流罪となったが、裴世清の帰国に際して、再び隋に派遣された。

## シーン1 崇仏論争と聖徳太子の功績

585年、敏達天皇崩御を受け、父・用明天皇が即位する。この頃、仏教の受容を巡って崇仏派の蘇我馬子と排仏派の物部守屋とが激しく対立。587年、用明天皇が崩御すると皇位を巡って争いになり、馬子は、豊御食炊屋姫(とよみけかしきやひめ)(敏達天皇の皇后)の詔を得て、守屋が推す穴穂部皇子を誅殺。守屋討伐の大軍を起こし、厩戸皇子もこの軍に加わった。討伐軍は河内国渡川郡の守屋の館を攻めたが、軍事氏族である物部氏の兵は精強で、頑強に抵抗し、討伐軍は三度撃退された。これを見た厩戸皇子は、**白膠の木を切って四天王の像をつくり、戦勝を祈願して、勝利すれば仏塔をつくり仏法の弘通に努める**、と誓った。すると討伐軍は物部軍を攻め立て、守屋は迹見赤檮(とみのいちい)に射殺されて、大豪族であった物部氏は没落した。同年、皇子は物部氏との戦いの際の誓願を守り、摂津国難波に四天王寺を建立した。588年、馬子は泊瀬部皇子(崇峻天皇)を皇位につける。しかし政治の実権は馬子が持ち、これに不満な崇峻は馬子と対立した。592年、馬子は東漢駒(やまとのあやのこま)に崇峻天皇を暗殺させた。

写真又はカット割り

写真又は  
カット割り

その後、**馬子は豊御食炊屋姫を擁立して皇位につけた(推古天皇)**。天皇家史上初の女帝である。厩戸皇子は皇太子(聖徳太子)となり、593年4月10日に摂政となり、馬子と共に天皇を補佐した。太子は594年に仏教興隆の詔を発する。翌年、高句麗の僧・慧慈(えじ)が渡来し、太子の師となり「隋は官制が整った強大な国で仏法を篤く保護している」と太子に伝えた。601年、太子は斑鳩の地に宮の造営をはじめ、605年に斑鳩宮に移る。法隆寺は607年に太子によって創建されたことから、斑鳩宮に移った直後にその造営事業にとりかかっていたようだ。また、太子は**四天王寺・中宮寺・橘寺・広隆寺・法起寺・妙安寺も創建**したと伝えられている。

斑鳩宮で太子は615年までに「法華経(ほけきょう)義疏」「維摩経(ゆいまきょう)義疏」「勝鬘経(しょうまんきょう)義疏」の『三経義疏(さんぎょうのぎしよ)』を編さんした。これらは経典の精密な注釈書で、その高度な内容からは、太子が驚くほど深く仏教の教義を理解していたことがうかがわれる。

写真又は  
カット割り

## シーン2 外交政策と大陸文化の受容

600年、新羅征討の軍を出し、調を貢ぐことを約束させる。602年、再び新羅征討の軍を起し、同母弟・来目皇子を将軍に筑紫に2万5千の軍衆を集めたが、渡海準備中に来目皇子が死去(新羅の刺客に暗殺?)。後任には異母弟・当麻皇子が任命されたが、妻の死を理由に都へ引き揚げ、結局、遠征は中止となった。この新羅遠征計画は天皇の軍事力強化が狙いで、渡海遠征自体は目的ではなかったという説もある。

607年、**小野妹子、鞍作福利(くらつくりのふくり)を使者とし隋に国書を送った**。「日出(い)づる処(ところ)の天子」で始まる国書に隋の煬帝(ようだい)は激怒したが、翌年に裴世清(はいせいせい)を日本に派遣し、国交が結ばれたのは有名な話である。『日本書紀』によると裴世清が携えた書には「皇帝問倭皇」(「皇帝 倭皇に問ふ」とある。これに対する返書には「東天皇敬白西皇帝」(「東の天皇 西の皇帝に敬まひて白す」とあり、隋が「倭皇」とした箇所を「天皇」としている。

写真又はカット割り

## シーン3 中央集権体制樹立への歩み

593年、推古天皇から摂政に任命され、これより推古・蘇我馬子・聖徳太子の3人を中心とした政治が始まる。603年12月5日、**冠位十二階を定めた**。これは役人の地位を大徳から小智までの十二段階に分け、個人の業績によって位を与える制度である。氏姓制ではなく才能を基準に人材を登用し、**天皇への中央集権を強める**目的があったが、馬子たち主要な氏族はこの範囲外であった。また604年4月3日、**十七条憲法を制定**した。「和を以(もつ)て貴(とうと)しとなす」で始まる憲法は、今でいう役人の規則である。豪族たちに臣下としての心構えを示し、天皇に従い、仏法を敬うことを強調している。

605年、太子は斑鳩宮へ移り、620年、聖徳太子は馬子と議して『国記』、『天皇記』などを編集した。聖徳太子には、刀自古郎女(とじこのいらつめ)をはじめ4人の妃がいたが、最も愛する膳大郎女(かしわでのおおいらつめ)とほぼ時を同じくして、622年にこの世を去った。遺体は、河内の磯長(しなが)(現大阪府太子町)に葬られた。

写真又はカット割り

## 聖徳太子(厩戸皇子)エピソード

太子には、没後早くから様々な伝説がうまれた。一度に八人の言葉を聞き分けたとか、観音菩薩の化身であるとか、聖武天皇に生まれ変わって大仏を造立したなどといった伝説である。

特に『日本書紀』にみえる太子が片岡の地(現在の香芝市・王寺町付近)で、飢者に出逢い食物や衣服を与えた。飢者の死後、墓を造り手厚く葬った。のちに太子の命により墓を調べると死体は消えていたという伝承は、その後様々なかたちで語り伝えられた。

また、中世以降、法隆寺や四天王寺(大阪市)、叡福(えいふく)寺(大阪府太子町)を中心に、**奇跡をおこす英雄としての太子信仰が世の中に広まっていた**。

### 万葉文化館



【具体的展示】  
■人物紹介(例):  
パネル展示を基本に、例えばフィギア(人形)を設置  
■歴史展示(例):  
パネル展示  
名場面紹介の映像(数分間)

### 橘寺



【具体的展示】  
■人物紹介(例):  
聖徳太子(厩戸皇子)誕生伝説をイラストで紹介  
■歴史展示(例):  
聖徳太子と橘寺との関わりを解説ボードで紹介

### 小墾田宮跡



【具体的展示】  
■人物紹介(例):  
推古天皇、聖徳太子、蘇我馬子らの功績を紹介  
■歴史展示(例):  
宮の復原イラスト  
推古朝の政治を解説ボードで紹介